

ねりま健育会病院

症 例 概 要 患者氏名：A様（80代 女性）

病名：左大腿骨骨折、多発脳梗塞

入院期間：平成30年5月上旬 ～ 平成30年9月上旬

経過：大腿骨骨折、多発脳梗塞にて前医では回復見込み無しと判断されるも、入院後経鼻栄養、尿管カテーテルを早期に抜き、リハビリを積極的に行い、チームアプローチ介入し、歩行の可能性も見出し、リハをさらに進めることで、介助歩行、経口摂取ができるまで回復し、施設退院までできた事例。

内 容

平成30年3月自宅リビングに倒れているところを発見された。左大腿骨骨折、両側散在性に多発脳梗塞を認めた。前医は回復見込みなしと判断されORIF施行となり2ヶ月間療養病院転院待ちとなっていた。当時、当院に氏の家族が入院中で氏の回復への望みをつなぐためスタッフへ相談があり、その後リハビリ目的で平成30年5月上旬に入院された。

入院時の状況は意識レベルJCSII-10、左股関節は強い可動域制限がみられ、寝たきり状態、移乗時にはプッシャーが非常に強く重介助であった。

栄養摂取は経鼻経管栄養であったが唾液によるむせ込み見られるような様な状況であり尿道カテーテルが挿入されている状況であった。

入院後積極的リハビリが開始された。栄養は毎食の間欠的な経管栄養とし、尿道カテーテルは早期除去し導尿対応。離床を基本とした生活プランとリハビリ介入が行われた。経過の中では起立性低血圧や、覚醒が進むにつれ危険行動が増すなど困難を来したがチームで問題に取り組みひとつひとつ問題を解決した。

回復が進むにつれ、氏の人柄が病棟でも見られるようになると、かわいらしい性格もありスタッフとのコミュニケーションが増加していき、通りすがりには必ず声を掛け合うような関係が構築され認知・回復に大きく影響したと考えられる。

氏の担当チームが回復がプラトーになり、次の生活を考え始めていたとき、氏の状態には強いプッシャーが残り歩行不能で車椅子生活と認識されていた。しかしチーム外メンバーから麻痺がないことから回復の見込みが指摘され、新たに積極的な歩行訓練が再開された。

その後氏は、病棟内を前方介助で歩行可能、食事は経口摂取が可能で動作はご自身で可能となった。認知機能の低下はあるものの、コミュニケーションは問題なく他の患者と談笑しておられることも多く病棟生活を楽しめるまでに回復され9月6日に施設退院となった。

この事例はチームで問題に一つずつ取り組んだこと、患者をチームのメンバーとして一緒に治療が出来たこと、第三者のアドバイスを有効に使えるチーム体制があったことが、予想を超える回復に繋がったと考える。